

井伏鱒二全集

第十卷

井伏鱒二全集

第十卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第十卷

昭和四十二年十一月二十日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 竹之内 靜雄

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京〇七六五一（代表）
振替東京四一二三

印 刷 株式會社 精興社
製 本 和田製本株式會社

目次

アブバカとの話	三
南航大概記	一〇
昭南日記	五七
十七年七月下旬頃	七四
ゲマスからクルーアンへ	七七
昭南タイムズ發刊の頃	八七
旅館・兵舎	九五
或る少女の戦時日記	九六
シンガポール所見	一二七
魚 拓	一二九
風貌・姿勢その二	一二三
兎の仔	一四三
かすみ	一四六
手紙のこと	一五〇
鯢つり	一六一
悪 夢	一六三

疎開記	一七〇
峠の雪の朝	一七六
黒い蝶	一七八
疎開餘録	一七九
溪流	一八〇
勉三さん	一八二
川原の風景	一八三
富有柿	一八四
轉入第一日目	一八七
歌碑	一八九
春宵	一九〇
太宰君のこと	一九三
亡友	一九五
婦人客	一九四
恐るべき風月老人	二二一
私の鳥籠	二三三

雀	二二七
十年前頃	二二三
「阿部一族」について	二五〇
私の萬年筆	二五五
懷中電燈	二六二
パイパイア	二六七
怪我をした記憶	二七五
疎開日記	二七七
蛙	二八一
田家展望	二八三
鶯の巢	二八五
點　滴	三〇〇
をんなごころ	三〇六
釣魚雜記	三二四
中村武羅夫さんのこと	三三九
仲　人	三三三

神近市子女史	三三一
永井の會	三四九
繩なひ機	三五四
掘出しもの	三五六
田中英光	三六三
惜別	三六六
迂濶な話	三六九
牧野信一のこと	三七三
爛徳利	三七九
引札	三八五
アスナロの木	三八九
つらら	三九三
貧乏性	三九九
丸木橋	四〇七
鼠小僧	四二〇
口髭	四二六

二月二十日記	四二九
湯河原沖	四三一
河川情況	四三六
ゲダリ沼	四三九
長崎の醬油瓶	四五六
國語讀本のこと	四六一
骨董	四六七
堀辰雄と將棋の香車	四七五
太宰治のこと	四七八
うぐひす	四八三
九月十四日記	四八八
十月十六日記	四九〇
御坂峠の碑	四九三
解題	四九七

井伏鱒二全集

第十卷

アブバカとの話

現在、私は宣傳部隊の一員としてマライのクルーアン郊外のゴム園のはづれにある民家に泊つてゐる。この家は洋風建築とマライ風のつくりを兼ねた家で床下が高く、窓もたくさんついてゐて風通しがいい。家族はマライ人の十二になる女の子とお婆さんの二人だけだといふ。しかし男の靴が三足、臺所の土間の籐椅子の下に置き忘れてある。部屋のベンキ塗りの板壁に、マライ義勇兵募集のポスターが貼りつけてある。初め私たちはこの家の婆さんと交渉して、この家の人たちに暫く他の家に行つてゐてもらふことにした。お婆さんは周章でゐたので男の靴とポスターをそのままにして手荷物さげて出て行つた。ポスターには、指揮杖を持った英國の將校を先頭に、その後からマライ人の兵隊が太鼓をたたきながら行進してゐる繪が印刷されてゐる。マライ文と英文を交互に用ひて宣傳語が書いてある。英文は次のやうな宣傳語になつてゐる。

Malays ! Your country needs you. Join the Malay Regiment.

お婆さんは出て行くとき、大事な品物や日本製の子供の玩具など一とまとめにして寢室に入れ、食器も來客用のものは硝子戸棚に入れて錠をかけた。その代り日常使用する食器類は、若し私たちが大切に取扱ふなら自由に使つてくれてもいいと云つた。私たちは食器を大切に取扱ふことをお婆さんに約束し、寢室の錠前のない扉に「開くことを禁ず」と書いた貼紙をした。お婆さんは子供を連れて約百メートルほど離れてゐるゴム園のなかの民家に引越して行つた。私たちは居間と客間を兼ねた鉤の手になつてゐる空室を事務室兼寢室とした。

私たちはお婆さんのことを「大屋さん」と云ひ、十二になる女の子を「大屋の子」と云つてゐる。私たちのゐる家の井戸水は、きたなくて洗濯もできないので、私は「大屋さん」の引越して行つた家の井戸を借りに行つた。一昨日のことであつた。つまり「大屋さん」のところへ貰ひ水に行つたことになる。その家には三組も四組もの家族が入り込んでゐた。法事か結婚式かのやうに多勢の大人や子供が土間のなかに集まつて、戸口のところに遅しさうな體格のマライ人が黒いマライ帽をかぶつて立つてゐた。私は全然自信のない英語でそのマライ人に話しかけた。

「自分は直ぐ近くの家に假寓してゐる日本人である。その家のお婆さんは、現在この家に引越してゐる。自分は自分の衣服を洗濯したいと考へるが、自分の住む家の井戸水は不潔である。故に、この家の井戸水を使ひたい。自分は自分のよごれた衣服を洗濯したいと考へる。」

しかし遅しさうな恰好のマライ人は、私の英語が拙かつたのか、私が洗濯物を頼みに來たと勘ちがひしたらしい。こんな意味のことを云つた。

「日本軍人よ、自分は貴官の衣服がよごれてゐることを誠に氣の毒に思ふ。しかしながら當家はいま取りこみ中のところである。幼兒を抱へた病妻もゐる。また病氣の幼兒を看護してゐる母親もゐる。洗濯物は支那人が印度人に頼んでみたらいいだらう。今はもはや、自分たちは砂糖さへにも缺亡をつけてゐる。」

そして彼は奥の臺所から硝子製の砂糖壺を持つて來て見せた。壺の底に僅かばかりの砂糖が残つてゐた。

私は洗濯物を頼みに來たのではないと云ひなほす必要を認めたが、もし云ひなほせば言葉を濁したと思はれはしないかと警戒した。それで、ただ簡単に頷いた。相手は砂糖壺を臺所へ置いて來て、今度は愛想よく私を土間の椅子に案内した。私の周圍には子供たちや大人たちが集まつて來て、すでに彼らに危害を加へないといわかつた私を物珍しげに眺め始めた。なかには私のそばに寄つて來て、腕を私の腕と並べて色をくらべて見る子供もゐた。その子は小さな指で私の腕を抓つた。私が彼らの皮膚と同じ色に腕を染めてゐるかどうかを確かめてみたらしい。半袖の軍衣を着てゐる私の腕は陽に焦けてマライ人の皮膚そつくりになつてゐる。私はその子供の才氣と無知に親しみを覚え、何か童謡のやうな歌をうたつてくれとその子に云つた。それを遅しい體格の男が、英語のわからない子供にマライ語で通譯した。一座のものは急に愉快さうに色めき立つた。奥にかくれてゐた女たちも板戸のかげから顔を出して私を見た。遅しい體格の男は奥から玩具にひとしいウクレレを持つて來て、椅子に腰をかけるが早いか頭を振りながらそれを掻き鳴らし始めた。子供たちは悲しさうな聲でマライ語の歌をうたひ出した。私には無論その歌詞の意味がわからなかつた。子供たちがうたひ終ると私は拍手して「ベリー・グッド」と云つた。大きな聲でうたつた子供にマライの五錢だまを一つやつた。背の高い子供には日本の一錢だまを一つやり、もう一人の子供には、佛印の一錢だまを一つやつた。

逞しい體格の男はアブバカといふ名前だと自己紹介した。クルーアンの北方二百五十キロの遠隔の地から家族を連れてここに避難して來てゐるさうであつた。年齢をたづねると、「自分は三十三歳以上の年齢である」と云つた。

それで私が、「三十三歳以上といつたのでは正確な年齢はわからない。それは自分の年齢を云ふ場合のマライ人の作法であるか」とたづねると「必ずしも作法ではない。しかし自分は三十三歳以上、三十五歳以下である」と云つた。彼は三十五歳であつた。

私はその逞しげな男に、マライの踊はどんなものかと云つた。すると彼は手を振つた。

「踊をすると、子供るとき親父が叱つたので、自分はちつとも踊を知らない。親父はずるぶん昔に亡くなつた。親父は自分にアラアの神を祈ることを教へてくれた。」

「親父が死んでからは、踊をしても叱る人はいないだらう。」

「親父が死んでからは、その後になつたお袋が叱つた。」

「それでは、お袋が死んでからは。」

「お袋が死んでから、お袋の弟が。その弟が死ぬと、その妹が叱る筈である。」

私が「さよなら」をして歸らうとすると、このアブバカといふ男は私に證明書を書いてくれと云つた。良民證明書は、たいいていの家の入口の扉に貼りつけてある。この家の扉にも貼紙がしてあつた。

「この家の家族は良民につき保護せられ度し——ぐん〇〇ぶたい」

これでもう充分な筈であるが、アブバカはこの日本文字の文章はすこしまだ短いやうに思はれると云つた。

この家には三家族も四家族も集まつてゐるのは明らかな事實だから、貼紙がもう一枚ぐらゐ餘計にあつてもいい筈だと云つた。そして紙と萬年筆を持つて來たが、私は良民證を書く資格がないので次のやうに書いた。「ぐん〇〇ぶたい」と書かないで「せんでん部隊員、井伏鱒二」と記入しておくことにした。

この家の人たちは日本軍の自分たちのため家を提供し絶大なる援助を致したるものなり

勇敢にして仁慈なる

大日本軍人各位

せんでん部隊員 井伏鱒二

寧ろ證明書といふよりもポスターのやうなものであつた。しかしアブバカは私に感謝して、その貼紙の上の向きを念入りに私にたづねた。

一昨日はまた、グラヴィアの寫眞をとるために、マライ語の通譯とカメラマン同道で、マライ人の或る顔役の住宅を訪ねた。その家は立派なドライヴ道につづく丘の上にある。庭には、たわわに實つたレモンの木が立ち並び、その庭さきに立つと町や部落が一望のうちに見えた。庭の横手の茶園には、眞黒な顔に白ベニキで目や口を描いた案山子が弓を引く姿で立つてゐた。私が通譯を介して玄關番らしいマライ人に訪問の用件を述べたところ、主人は不在だから奥様に申し上げてみるといふことで私たちを應接間に通した。やがて年配のマライ婦人が現はれて、しとやかな動作で私たちと向ひあつて椅子に腰をかけ、ピンロージュの實を嚙んでゐた口から黄色い唾を吐いた。床の上に、べつと吐いた。私は彼女が現はれるより前に、通譯を介し

て玄關番らしいマライ人を相手に次のやうな質問應答をとりかはしてゐた。

「町の噂にきくと、當家の御主人は趣味としての演説がお上手であるとの話だが、事實お上手であるか。」

「然り、自分は英語を解さないが、當家の御主人は自分どもに對しても、マライ語で非常に上手にお話される慣はしである。また當家の御主人は、虎狩と象狩の名手である。」

「當家の御主人は、今度の戦争が勃發した當初のころ、わざわざシンガポールに出かけて大演説をされたといふ噂である。その演説は聴衆の大喝采を博したとの噂であつた。」

「然り、然り。」

「その演説の内容は、親英抗日を主張する大演説であつたとの評判である。」

「然り、然り。」

すると應接間の窓の外からのぞいてゐた一人のマライ人が、

「その男の云ふことは、ことごとく嘘である」と云つた。

「然り、然り。いまの話はことごとく嘘である」と玄關番らしい男が云つた。

そこへ當家の主婦が現はれたのであつた。

寫眞をうつした後、ふと卓上のアルバムをあけてみると、虎狩や象狩の記念寫眞が幾枚もあつた。當家の主人が、射とめた象のそばにジョホール王様と並んで立つてゐる寫眞もあつた。また日本人と並んで、倒した虎のそばに立つてゐる寫眞もあつた。

「この日本人は、ミスター〇〇といふ日本の門閥家である。そのお方は、當家に五十日間も御滞在になつて